

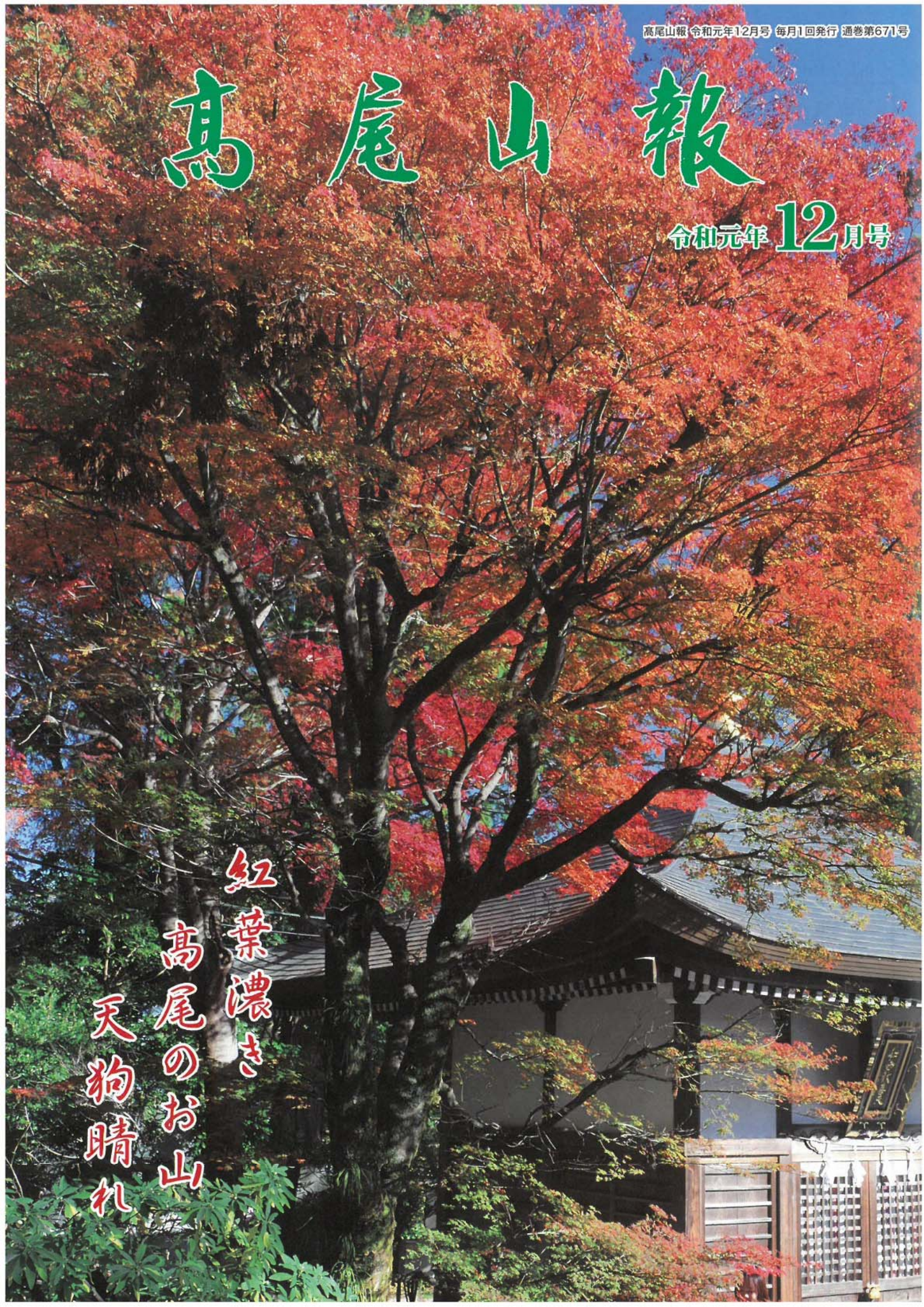
高尾山報

令和元年 12月号

紅葉濃き

高尾のお山

天狗晴礼



法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(90)

万物は秋の霜よく色を壊る。四時は冬の日最も凋年なり

〔白居易「白氏文集」〕
〔至てのものは秋の霜によつて色を変えてしまふ。四季は冬の日が歳月を少なくしてしまふ〕

今年も残り僅かとなりました。霜をまとつていた秋の山々も様変わりして、今は冬の朝日を浴びた霜がキラキラと大地に輝いています。陰暦の十月から十二月は「霜枯れ三月」とも呼ばれますが、荒涼とした冬枯れの景色の中にあつても、せめて身と心は温かくして過ごしたいものです。
去る十一月十日、天皇皇后両陛下の祝賀御列の儀（パレード）が行われました。雲ひとつない秋晴れのもと、皇居・宮殿

から赤坂御所までの約四・六キロの治道は、およそ十二万人の群集で埋め尽くされ、祝福の歓喜の渦に包まれました。秋の陽光に照らされたイチョウ並木をお通りになつた両陛下のお姿は眩いばかりでした。

昔、弘法大師空海（七四〇―八三五）は、時の淳和天皇（七八六―八四〇）に対して、
今上陛下、
体は金剛を練し、
寿は石劫よりも
堅からむ。
（『性霊集』）

（天皇陛下の玉体は金剛のように堅固であり、御寿命は盤石劫よりも長いことだろう）との願文を捧げました。時代は違えど、平和な世の中が未来永劫、末永く続いてほしいと心か

ら願います。

さて、この願文の中にある「石劫」とはどのようなものでしょうか。実はこの「劫」という言葉は、仏教の時間を表す単位で「極めて長い時間」を意味します。その長さを喩えるなら、天人が四十里四方（二五七キロ四方）の巨石を薄衣で百年に一度括つて、石が磨り減つて無くなつても終わらない時間とも、また四十里四方の城に芥子を満たして、百年に一度一粒ずつ取り去つて、芥子が無くなつても終わらないほどの長い時間とも言われます（『大智度論』など）。『法華経』「普門品」というお経の中に「歴劫不思議」（永久に分らない）という文句があるように、人間には到底考えが及ばない、とつともなく長い時間です。ちなみに、落語「寿命無」には「五劫の擦り切れ」とあります。これは「劫の五倍のことで、阿弥陀如来がまだ法蔵



錦秋の紅葉もやがて冬枯れの景色となる

折り折りの記 124

大晦日薬王院の除夜の鐘

波多野 重雄

高尾山を愛し春夏秋冬、季節の花や鳥のうたふ声に心がなごみ、そして、大自然に沐浴し、多くの山の友と親しみ一年最後の日に薬王院の除夜の鐘の音を聴くのは冥加に尽きる。「杖友こき」と除夜時かけて青ふも」の波郷の句に身をたづまされる。
一年を振り返り、肉親や友等の死が除夜の鐘の音に浮かび現実を肯なう気持ちになって来るものがある。「紅白歌合戦」に興じるもよし。過ぎ去つた一年を静かに振り返り「除夜時かけて青ふ」ような心に浸るのがおおみそかであらう。
（高尾山健康登山の会会長）

百観音霊場巡礼 127

厚木市 荒井 一雄

冬遊天開山

閑静鎮座観音堂

拝唱心経観音經

天然岩石成絶壁

得初父母恩重經

石切りの

けぶりたひく大谷寺

「父母恩重經」の寺に得る

冬、天開山（大谷寺）に遊ぶ

閑静に鎮座する観音堂…

拝み唱ふ般若心経・観音經を…

天然の岩石は絶壁を成し、

初めて得る「父母恩重經」を…

合せてひたすら泣き続けました。

日蔵が「おまえはどういう鬼か」と聞くと、鬼は涙にむせびながら「自分は、四、五百年前は人間でしたが、人に恨みを抱き、このような鬼の身となりました。その敵はもちろん、子々孫々に至るまで一人残らず殺してきました。しかし、私の中には今でも尽きせぬ怒りの炎が燃え盛っています。こんな心を起さなければ、極楽や天界にも生まれませんでした。恨みを抱え、このような鬼の身となつて、計り知れない無量億劫（未来永劫）の苦を受け続けることは悲しいものです。

他人に恨みを抱くのは、我が身に返つて苦を受けることでした。もつと前に気づいていたなら、恨み心を持たなかつたでしょう」と語り涙を流し続けました。
（宇治拾遺物語）
「人を憎むは身を憎む」

東日本大震災 義援金の御礼とご報告

熊本地震

（一度でも心に安想を抱けば、永劫の罪を受ける）

一念五百生 繋念無量劫

（太平記）

（栃木北部教区普濟寺）

という諺のように、他人に抱いた憎しみは、めぐりめぐつて自身を鬼の姿に変えました。それは因果応報の理に導かれた、未来永劫の責め苦であつたのでしよう。

いつまでも迷いの世界にあることを「長夜の闇」（長夜の眠り）と言います。間もなく冬至が近づき、なかなか明けない冬の夜に寂しさを感じても、怒りの炎のような心の闇夜には迷うことなく、新しい年の光を心静かに待ち望みたいと思えます。

平成二十三年に発生しました東日本大震災、及び平成二十八年に発生しました熊本地震の被害による被災地復興のため、高尾山では境内に募金箱と設置し、大勢の御参拝の方々から多大なる御支援を賜りましたこと、謹んで御礼申し上げます。

東日本大震災の義援金の総額は千二百七十九万三千四百六十七円となり、以前に高尾山報で御報告させて頂きましたように、岩手県奥州市の興性寺様と通じて被災各地へお届けさせて頂いたいただきました。また、熊本地震の義援金は総額四百六十七万円となり、八王子市を通じて熊本市に送られます。熊本被災者復旧支援金として役立てさせて頂いております。多くの皆様のご心温まる御支援、御協力に重ねて御礼申し上げますと共に、被災地の一日も早い復興と御祈念申し上げます。

大本山 高尾山薬王院

高尾山へ七五三詣り

十一月十五日、高尾山報にて「法の水荃」を連載中の高橋秀城先生（さくら市普濟寺御住職）一家が秋深まる高尾山を訪れ、御子息・秀眞君の七五三詣りを行いました。二行は不動院にて大山御貫首にご挨拶された後、山上大本堂で御護摩供修行に参列されました。

秀眞君は緊張した面持ちで御護摩供に参加されておりましたが、その後の菅谷執事長との面会の際には笑顔がありました。



書院における記念撮影

座布団と幸せ運ぶ 山田隆夫さん来山



笑点曆を持って大山御貫首と

十一月二十日、日本テレビ系で放送されている、『笑点』の大喜利コーナードで、三十年以上に渡り座布団運びをされている山田隆夫さんが、紅葉彩る高尾山に来山されました。

山田さんは葉王院大本堂をお参りされた後に、山麓の不動院において、大山御貫首と面会して親しく歓談され、来年の笑点曆（カレンダー）を手渡されました。



弁天洞前にて

御礼
弁天洞を自主的に清掃

多摩市からお越しの西村江美子様におかれましては、弁天洞周辺の清掃を行って頂きまして、深く御礼申し上げます。

お話を伺いますと、西村様は十年程前から健康登山を始められ、最近では五月と十月に行われる高尾山内八十八大師巡りに、毎回参加されているとのこと。掃除を始めようと思ったきっかけは、一年半ほど前に弁天洞を訪れた際、落葉が散乱する様子を目にしたことで、以来自主的に落葉掃き等が続けられております。

西村様によりますと、ご自身以外にも弁天堂周辺を、自主的に清掃をされている方がおられるとのこと。また弁天堂以外にも、健康登山の方々には御護摩受付所付近等を、早朝に清掃する姿がよく見受けられます。

清掃活動をされている方々のおかげで、高尾山の景観が保たれていることに対し感謝申し上げますと共に、西村様にも重ねて御礼申し上げます。

高尾山もみじまつり開催

十一月二日～三十日



熱唱する童謡歌手の雨宮知子さん



語り部の会による「とんとん昔話」



八王子車人形による「三番叟」



原囃子連による獅子舞



深澤美結ちゃん

西室世絆ちゃん(左)と飛吾君

鈴木詩乃ちゃん

七五三おめでとう

葵の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館 外山 徹

33

終章 残された三つの関心事

その前史から筆を起し、高尾山が江戸中期から幕末にかけて紀伊徳川家の祈禱所を勤めた歴史について紹介してきた。稿を閉じるにあたって、残存する史料からは詳らかにし得ないながらも興味関心という点で見過ごしにできない事柄について考察を試みたい。

祈禱所の創始

葉王院文書紀州家関係史料の内、最も古い年次が判明しているのは宝暦五年（一七五五）二月付の家臣佐野伊左衛門による書状である。つまり、それ以前の動静をリアルタイムで作成された文書から探ることはできず、紀州家の祈禱所となった当初の状況やその理由に

ついては詳らかではない。それ以前の事柄を探るには、後世の編さん物である由緒書に頼らざるを得ないが、高尾山と紀州家との関係を記した由緒書は、寛政二年（一七九〇）をはじめ四次にわたって作成されている。

年次が最も古く確度が高いと思われる寛政二年の由緒書によると、その始まりは六代宗直の時代に三ヶ年の祈禱を勤めたこととされ、修復料として一〇両を下し置かれたという。また、不動尊像及び護摩壇が寄進されたという。宗直の治世は享保元年（一七一六）から宝暦七年（一七五七）まで足かけ四二年にわたり、宗直代と言っても時期にはかなりの幅

がある。天保七年（一八三六）の由緒書は不動尊像・護摩壇の寄進を享保三年としている。この具体的な年次は寛政度には無い。では、どこからこの年次が出てきたのだろうか？

天保の由緒書は同時に享保三年の鷹の奉納を記しており、この奉納は同時代の史料に裏付けられる史実である。紀州家による奉納であるかは疑義もあるのだが、奉納には紀州家ゆかりの者が関わっており、葉王院がこの鷹の奉納を紀州家によるものと解釈し、その交渉の始まりを享保三年としたのだろう。佐野の書状には「先年御寄附の御戸帳・水引損じそうろう付き」とあるの



江戸期には護摩堂と呼ばれた現在の奥之院に安置された不動明王像

戸帳・水引とは仏前に飾る幕の一種で、紀州家の葵紋付だった。この宗直による不動尊像寄進は紀州家の祈禱所たる大きな根拠になっていた感もあるが、この像は現在奥之院不動堂に安置されている二童子を脇侍とした立像の可能性が高い。この像は鎌倉時代の作と評価され、伝えられる興業大師覚鑿の作とは年代が一致しない

が、桃山末期の荒廃以後に移入された可能性がある。八代重倫の時に不動尊像の厨子修復を願い出ているので、その時点（明和九年（一七七二）ないし翌安永二年か？）で紀州家寄進という認識があったという推測になる。何れにしても、像高一・九センチで脇侍をともなう立派な像は大體越からの寄進である可能性が高い。

重倫帰依の動機

紀州家との関係が最も密になったのが、八代重倫の時である。明和八年（一七七七）九月の直筆書状の到来以降、天明六年（一七八六）十一月に御札の献上が止まるまでの一五年間である。重倫は短気で残忍、あるいは豪放で勇武な性格が伝えられているが、葉王院文書から看取できる仏法に篤く病弱な様子からは違和感を覚える。その人物像は巷間伝えられる御乱行の殿様とは素直に受け取れない謎を秘める。

確かに六代宗直も領内各地の寺社に対する保護は手厚いものだった。七代宗将の人となりについては、あまり具体的にではないが、注目すべきはその側室で重倫の生母である清信院の存在である。清信院は幕府の御用医師の娘で、元來、紀州とは縁遠かったはずだが、継嗣の生母として一躍その地位を確立、地元の名刹根来寺中興の檀越として財を注ぎ得る立場となった。

清信院に注目したきっかけは、文化六年（一八〇九）「江戸田舎日護摩講中元帳」に記された越前松平家の名だった。当主重富の正室お政の方は重倫と同腹の妹である。当時、大名の奥向きが寺社信仰の有力な担い手だったことは、葉王院文書からも管見されるが、それを考えても越前家が檀中となった理由としてこのお政の方の線が浮かぶ。お政は実家の動向に影響を受けた可能性が

あるが、生母清信院からの感化があったのではないかと考える。つまり、清信院は元々信心に厚い女性であり、その気質が兄妹に受け継がれたのではないかと。重倫が根来山興教大師作と伝えられている不動尊像を祭祀していることを知っているのかは定かではないが、直筆の書状からはその仏法への篤い帰依が伝わってくる。それ故に父祖以来のゆかりの靈山に格別の帰依を示すことになったのではないかと。

新政府は諸藩に対し藩邸を引き払って江戸在住の藩士を国元へ帰すよう布達。和歌山藩士も六月中旬までに順次退去して行った。万延二年の音信の形式化した様からしても、江戸藩邸の撤収を二説としたが、『南紀徳川史』によると「明治三年（一八七〇）には「ご由緒これある諸社寺より年中正・五・九月ご祈禱の御札守等差し上げ、ご体裁一変により、すべて廃止」とあり、維新後は寺社との旧慣も見直さざるを得ない事情があったようだ。実は本稿も多くの依頼が来た。『南紀徳川史』からは高尾山開連の記事を見出すことができなかつた。文政二年（一八一九）十二月に赤坂藩邸の地鎮祭をおこなった実績などに鑑みると、相応の存在として認識されていたはずである。明治も半ばになって編さんが開始される頃には高尾山との関わりの記憶も薄れていったか、あるいは奥向きへの出入りであったが故に公用日記に動向が記されなかつたのであるのか。

このような経緯もあってか、世に知られていなかった紀伊徳川家と高尾山との関係は、葉王院文書調査の進捗によって明らかとなった。特に八代藩主重倫代の大量の書状類の残存は、大名家と祈禱系寺院とのやり取りをリアルタイムで知ることのできる非常に貴重な史料である。そこには、まだまだ新たな事実が見出される可能性が十分に感じられる。〈終〉

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

《次号予告》 令和二年正月号より、引き続き高尾山の歴史に関する記事として「高尾山年代記―歴代山主の事跡をたどる―」の連載を始めます。



台風が大きな傷跡を残し過ぎて行きました。沢山の方が被災され、命を無くされたり、大切な営みを奪われ、未だに土砂崩れなどの危険にさらされ避難生活をなさっている日々が続いています。テレビを通してしか状況を知ることができない

温かいエネルギー

シンクソン 歌手

友納あけみ

いのですが、突然の出来事に戸惑い苦しんでいるらっしゃる皆様のお気持ちを想像して胸が強く痛みます。恋文のコンサートを控えていて、丁度、東京を直撃した日に音楽仲間がコンサートを中止にせざるをえなく、自分だった

ら大変！と思ったりしていたのですが、一夜開けてみると、そんなことを言つてられないほどの大災害！こういう災害が起こった時にはいつも、歌なんて歌っていいのいか？考えさせられています。翌日は自然の力をみせつけるかのような雲二つ無い青空！あの風は何処へ行つてしまったのか？と大きな自然の前では人間の力は本当に儂いと、何か暗澹とした気分になつてしまいました。そんな時、テレビから流れてきたラグビー中継！倒されても倒されても前にゴールに向かう選手達の姿は人間の命の煌めきを感じさせてくれました。ちゃんとルールに従い正々堂々、体ひとつで仲間と力を合わせ戦う！試合が終わればノーサイド！勝つても負けても相手を称賛しあう姿は感動的でした。そして試合が終わる、何年もの間、すべてのことを犠牲にし

浅見家 子育観音法要厳修

11月3日(日)



て夢にまでみたベストエイトを手に入れた歓喜の試合の後、まだ息を弾ませた状態の選手の口から「ラグビーは小さなこと！それより被災された方達が大変だ！少しでもパワーを送れたなら！」という言葉聞いた時！あー人間って本当に素敵だなあ〜と思わず、涙が溢れてしまいました。文化勲章の様な賞を与えられた、あるアフリカの歌手が「音楽は国境を越えて走る汽車だ」と語っていました。音楽も

スポーツも、人間の肉体を使つてやることは全て、国境を越えて感動を生きた勇気を！与えてくれます。私もこの汽車に乗る、感動や温かいエネルギーをお届け出来るよう、精一杯歌つていきたいと思つています。まだまだ、雨も続くようです。早く穏やかな日々が日本中に戻つてきますように；祈るばかりです。不順な天候が続きます。寒さもこれから、皆様、お風邪などお気を付けて、お大切に……！

おはなし散歩道 初雪の朝

八王子市 池田 美絵

山奥の森に一匹のタヌキが住んでいました。「あのね」と言っても「なあに」と応えてくれる仲間はいません。「友だちがほしいなあ」と、タヌキは常々、思っていました。ある日、森の中を歩いてると、向こうから一匹のイタチが歩いてきました。

「こんにちは。友だちになろうよ」

ところがイタチは、タヌキを見たとき、牙を見せて言いました。

「おまえは、おれ様が捕まえた小鳥を横取りしたヤツだな！」

タヌキはハッとしました。少し前、確かによその巣穴から獲物をとったのです。それがこのイタチのものだとは思いませんでした。悪かったとは思いましたが、イタ

チのあまりの剣幕に血が上つてしまいました。

「おまえだって、おいらのカエル盗んだことあるよね！」。売り言葉に買い言葉で、適当なことを言つてしまいました。結局、けんか別れになつて

タヌキは自分の巣穴に戻つてきました。

「イタチのやつ、本当に頭にくる！あんな言い方することないじゃない！」。タヌキはいつまでも腹を立てていました。しまいには、イタチのつづらな

瞳も柔らかなふさふさしたしっぽも、すべてが憎らしく思えてくるのでした。

しかし、何日か経つと寂しさが襲つてきました。言い過ぎてしまったことを後悔し、ため息をつきました。

一方のイタチも独りぼつちでした。森の中でタヌキに声をかけられた時、心の底ではうれしかったのですが、憎まれ口をたたいて怒らせてしまいました。小鳥一羽ぐらい

取られても巣の奥には十分な獲物があり、困ることなんかなかったのです。でも、けんかをしてみました。後では、正直な思いを打ち明ける勇氣はありませんでした。

やがて、冬の気配を感じる季節になりました。ある朝、タヌキはこれまでになく寒さを感じて目を覚ました。巣穴の入り口を見ると雪で半分ほどが覆われています。

「初雪だ。どうりで寒いわけだ。タヌキは、巣穴にあった枯葉を一箇所にまとめ休をもぐり込ませました。

「ふーっ。暖かい。タヌキは独り言を言いましたが、ふと、この前のイタチのことを思い出しました。「この寒さの中でどうしているのだろう」と。心配でたまらなくな

り、気がつくくと、イタチの巣穴を目ざしてかけだしてしまいました。淡雪にタヌキの足跡が点々と続きます。

案の定、イタチの巣は雪ですつかりふさがれていました。中の様子は見えません。閉じ込められているかもしれない不安になったタヌキは、前足を使つて懸命に雪をかき出します。

「イタチくん、イタチくん」。やつと、小さな穴があきました。イタチはタヌキが呼ぶ声で目を覚まし、丸まつていた体を伸ばしました。

「タヌキくんか。「初雪が降つたよ。大丈夫か？」タヌキが声をかけると、イタチはあくびをしながらうなずきます。事の次第があまりわかっている様子でした。

「雪に埋もれるところだったよ。でも無事だよ。タヌキはくすくすと笑いました。

二匹のあいだに暖かなものが通いました。イタチも「心配してくれてありがとう」と、素直な気持ちを伝えることができました。

それからというものの森の中でじゃれ合う二匹が見られるようになりました。獲物の自慢をするとはありましたが、取り合いをすることはありません。

友だちをつくりたいなら、自分から行動を起こすのがよいようです。(挿し絵・小出 茂)



観音菩薩の宗教

24

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

モンゴルの活仏とターラー信仰(そのII)

ターラーナータのターラー信仰

前回、モンゴルにおけるターラー信仰を考察するにあたり、モンゴル最初の活仏ザナバザルについて述べた。彼は熱心なターラー信仰を持ったが、その思想的根拠となったのは、チベットの大学匠ターラーナータ (Taranatha 一五七五〜一六三四) チベット名クンガニンポ (Kun dga' snying po) の所説と考えられる。ターラーナータは遷化後、ザナバザルに転生し、モンゴルの活仏制の中心として聖俗で活躍した。

現在、モンゴル国と中国内モン自治区に分断されるモンゴルは、清朝時代には北京からの視点で外蒙古・内蒙古と呼ばれていた。これは満洲族から

イ・ラマの称号を奉呈し、チベットとモンゴルには施主と帰依処、ないし弟子と師の關係が築かれた。ソナムギャムツォの魂はさらに二代、遡られて第三代ターラー・ラマとされ、その後、新たな肉体に転生しつづけた現在の十四世まで継承されている。ターラー・ラマは観音菩薩の生まれ変わりと信ぜられ、その尊さから活仏の思想と制度は瞬く間にチベット仏教圏に広まった。転生生活仏制は、寺院にとつても信者にとつても有り難いものであった。

活仏はチベット語でトウルク (gutsuk) といい、転生した身体すなわち化身を意味する。モンゴル語では「変化」を表すホビルガン (qubilan) と訳された。いずれもサンスクリット語のアヴァターラに淵源する語で、権化・化身が原意であった(拙稿「観音菩薩の宗教」①参照)。ターラー・ラマが観音菩薩の化身と信ぜられたよう

に、他の活仏たちの起源にも仏菩薩や高僧が考えられた。たとえばチバンチェン・ラマは無量光仏(阿彌陀仏)の化身であり、チベットで初めて活仏の名跡となったカルマバも観音菩薩の化身とされた。

ザナバザルは、チンギス・ハーンの末裔である「黄金の家系 (altan yuug) として生き仏となり、日本でいえば皇族にして任職たる門極と同様、聖俗の頂点を極めたことになる。ザナバザルもチベットの活仏同様、その魂は前世にまで遡及され、ターラーナータの転生者とされた。ターラーナータは高僧にして大学者で、一六〇八年に著した「インド仏教史 (T Gyā gar chos 'byung)」(寺本婉雅「ターラーナータ印度仏教史」西藏傳佛典譯註出版社、一九二八年)でよく知られている。その

四年前、彼は「ターラー・タントラの起源を明らかにする史書―黄金の数珠 (Sgrol ma rgyud kyi byung khung gsal bar byed pa 'lo rgyus gser gyi phreng)」を著し、「ターラー儀軌の起源を述べるとともに、ターラー菩薩の諸功德を記した (Martin Willson, In Praise of Tara - Songs to the Saviouress, Wisdom Publications, London, 1986) ことでは以下に「黄金の数珠」におけるターラーに関する記述を見て、ザナバザルが広めたであろうモンゴルにおけるターラー信仰を考察したい。

ザナバザルとターラーナータはこの世では時間を共有していないが、宗教上は魂の転生者として同一人物と考えられている。ザナバザルの前世であったターラーナータの思想を見ることは、ザナバザルのターラー思想を知る上でも意義が大ききだろう。

『黄金の数珠』は、最初にターラー・タントラがジャンブドゥヴィーバ(閻浮提。人間が住む世界)にもたらされた縁起を記し、次いでターラーが取り除く「十六怖」をエピソードとともに述べて見てみよう。

(第一) あるクシャトリヤが公園で居眠りしてい



ザナバザル筆とされるターラーナータ肖像画(部分)。持物は見にくいですが、右手に金剛杵、左手に金剛鈴を持ち、両手を胸前で交差する金剛卍迦羅印 (vajrahankara) を結ぶ。Tsultem 氏個人蔵 (The Eminent Mongolian Sculptor-G-Zanabazar, Ulanbator, 1982)

ると千の武器を携行した敵軍に囲まれたが、ターラーの名を呼ぶと空に尊い夫人が現れ、その足下に強風が吹いた。兵士たちは十方に吹き飛ばされ、それぞれに国に帰された。

(第二) 木を集める男が空腹の雌ライオンに出あい、くわえられて洞穴まで連れていかれた。男がターラーに祈ると葉つ

ばをまとった女性が現れ、男をライオンの口から取り出し、市場まで連れていってくれた。

(第三) 十二歳の田舎娘が深山で花を集めていると象に捕まり潰されそうになった。娘がターラーの名を思い出し助けを求めると、象は娘の家来になり礼拝した。市場や寺院などで象が娘を

拝しているのを見て、感心した国王は娘を后に迎えた。

(第四) ある家族が争いに巻き込まれ、家に放火されて逃げられなくなった。彼らが「ターラーよ、ターラーよ」とその名を呼ぶと美しい青い雲が現れ、その家のみに牡牛の軛ほどの(深さの雨量の)大雨が降り鎮火した。

(第五) ある売春婦が街で商人に出会い、五百個の真珠の首飾りをもらった。彼女が夜中に商人の家を訪ねようと家を

出ると、途中で尸利灑の木 (Sriga) の枝を拾った。そこには毒蛇がいて、彼女は巻き付かれた。彼女がターラーの名を呼ぶと蛇は七日間、花輪になり、のちに無毒の白蛇となった。川に行つてし

(第六) ゲジラタ (Gajirata) の大商人が千頭のラクダと五百頭の牡牛に荷を積んでマル (Maru) の国に向けて出発した。途中の原野に千人の盗賊が住んでいて、通りかかった商人たちの肉片や血や骨で満ちていた。盗賊は羅刹 (raksha) のごとく人肉を食べていた。商人がターラーに祈ると無数の兵隊が現れて、ひとりの盗賊も殺さずに遠くに追いやってしまった。

(第七) 泥棒の頭が国王の宝庫に忍び入り、中にあった酒を呑んで寝入ってしまった。頭は見張りに見つかかり牢屋に入れられ縛り上げられた。彼がターラーに祈ると縄

が解け、牢の扉が自然に開いて自国に逃げ帰った。頭の夢に寶石で着飾った女性が現れ、盗みをやめるよう諷めると、泥棒たちは善行を積むようになった。

(第八) 五百人ほどの商人が三隻の船で宝の島に行った。一隻に宝を積んで、白い柁櫃の木島に行った。二隻目の船に柁櫃を積んで帰ろうとすると、海の神が怒って荷を積んだ二隻は難破した。商人たちが毎晩ブラフマー、ヴィシユス、シヴァ、ソーマ、スーリヤ、クヴェーラなどの(ヒンドウ)の神々に祈つても助からなかったが、仏教徒の俗人がターラーの十音節の真言を唱えると船はインドに帰還でき、寶石と柁櫃を積んだ二隻も帰ってきて合流した。

以上、ターラーが救う「十六怖」のうち半分を見た。紙幅の関係であとの半分は次回に譲るものとする。

祝 講社記念登山

三友建設高尾講 登山七十回

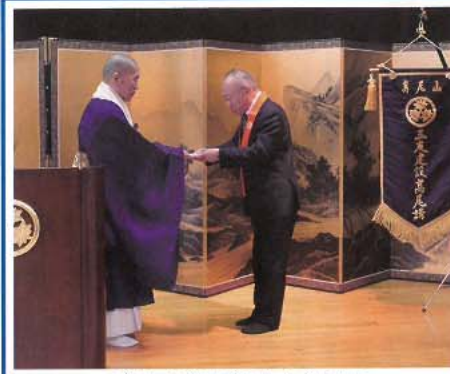
高尾山愛心講 登山五十周年

十一月六日に三友建設高尾講が登山七十回を、二十六日には高尾山愛心講が登山五十周年を迎えられました。

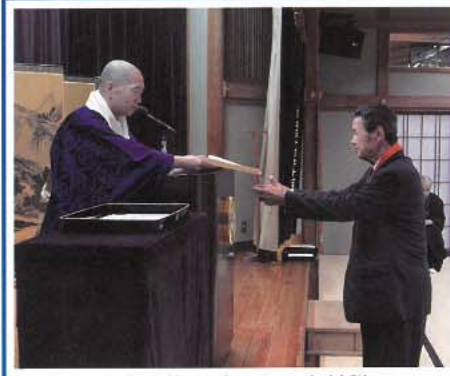
昭和五十九年に結成された三友建設高尾講（講元・外池正明氏）は、八王子市内で三友建設株式会社を経営されていた先代講元の外池孝雄様が、個人だけではなく会社として信仰を深めたい、との思いから設立され、現在は御子息の正明様が講元と共に高尾山参与の職責を引き継がれております。現在では新緑と紅葉の時期、年二回の団参を続けられております。

高尾山愛心講（講元・木村勇氏）は高職の団体を母体とした講社であり、例年一般社団法人江戸消防記念會木造豊好会の皆様と高尾山に訪れます。奥之院の石段新設工事に関わったことを機に練馬区大泉町の第十區九番組の当時の組頭・小川龍太氏を初代講元として、昭和四十四年に「大泉愛心講」の名前で設立されました。その後、講社の規模が大泉町を超えて拡大したため、講名を改称し現在に至ります。

今回の記念登山にあたり両講社より、本堂へ御信徒様用の椅子を数多く御奉納頂きました。厚く御礼申し上げます。



奉納目録を渡す外池講元



感謝状を受け取る木村講元

三友建設高尾講

高尾山愛心講

厄年を過ぎた
御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・一年を

七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを

八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を

九十才を過ぎたなら
一日・一日を

気を付けられ
日々を大切に
圓滿にお暮し下さい

当山では皆様の

（身体健全）を祈念して
（寿命長久）を祈念して

福壽圓滿の

御護摩を

お申し受け致しております。

高尾山物語 20

八王子代官所



絵・橋本豊治

交通の要衝としての八王子
八王子は東西を江戸と甲府、南北を川越と鎌倉を結ぶ街道が交わる拠点として発展しました。現在でも高速道路（中央道と圏央道）と鉄道（京王線や中央線、八高線、横浜線）の拠点の一つであります。

八王子は古来より、東西南北をつなぐ交通の要衝でありました。そのため江戸幕府は、八王子を江戸防衛の重要拠点と定めたのです。

拠点整備責任者の代官頭として八王子に赴任したのが、後に「天下の総代官」とも呼ばれた大久保長安でした。長安は小門宿（現在の小門町）に陣屋（代官屋敷）を設け、配下の代官達と共に甲州街道の整備や治水事業を始めとした、八王子周辺の大規模な開発を進めました。

代官所設置に伴い、経済・行政の中心部は城下町のあった現在の元八王子町付近から、横山町周辺へ移りました。

千六百五十年頃になると、八王子宿（八王子横山十五宿）は甲州街道中で最大規模の宿場町へと発展しました。

お世辞言わずに
媚びらず生きる
甘えを捨てて
慣れすぎず

院内散歩

薬王院の展示物

34



木版画 『嵐山雪花』
作・井堂雅夫

新たな年の安寧を祈る 正月限定 新春特別祈禱札

このたび新たに正月期間（二月一日～二月三十一日）の限定で「令和新春特別祈禱札」を授与させていただきます。

近年は自然災害をはじめとする様々な災厄が頻発する時代でありました。しかしながら、元号が令和に改元されてから初めての正月を迎えるにあたり、薬王院におきましては種々の災いが少なくなるよう、また明るい社会を建設できますようにと、特に御祈願申し上げる次第であります。御信徒の皆様方におかれましては、この機会に是非御来山を頂き、新たな時代の安寧を共に祈り下さいますようお願いいたします。

ご祈禱料は一律三万円となります。
願意（お願い事）は「除災開運」のみと限らせていただきます。
御来山当日でのお申込みも可能ですが、正月期間の御護摩受付所は混雑が予想されるため、事前でのお申し込みも頂けます。また、御信徒様各位の都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に郵送でのお取り扱いもいたしておりますので、ご希望の方は手紙・FAX・メールにてご連絡ください。



■お問い合わせ先

電話 042-661-1115
FAX 042-664-1199
メール shinto@takaosan.or.jp

お護摩修行のおすすめ 皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。
お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様への祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。
御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。
大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。



郵送御護摩
申し込み受付について
当山では、お護摩修行に参加できない方の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。
手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、インターネットの「高尾山薬王院公式ホームページ」の御護摩祈禱のご案内からも直接申し込みをすることが出来ます。是非ご利用頂きますようお願い申し上げます。

御護摩奉修時間

十一月一日～四月十四日まで

午前六時
九時
十一時
午後十二時半
二時
三時半

※一月中の御護摩時間につきましては二十ページの「新春大護摩奉修特別時間」をご覧ください。

高尾山のお護摩札とお供物



交通安全 (ステッカー) (車内用札) 価格 1,800円
お護摩 3,000円以上
お護摩 5,000円以上
お護摩 10,000円以上
特別大護摩 30,000円以上
開帳大護摩 50,000円以上
特別開帳大護摩 100,000円以上

- 家内安全(家)
 - 商業繁栄(商)
 - 事業繁栄(事)
 - 交通安全(車内用札)
 - 交通安全(身)
 - 災難消除(災)
 - 厄除(厄)
 - 身体健全(体)
 - 当病平癒(病)
 - 開運(開)
 - 良縁成就(縁)
 - 安産成就(安)
 - 入学成就(入)
 - 心願成就(心)
 - 御札(札)
 - 奉納杉苗(杉)
- お護摩の願事
お願い事は一律一願をします。
併願(二願)は一万円より受け賜ります。
紙し、五千円で家内安全と御護摩のみ併願とさせていただきます。
お護摩札には年令・生年月日等が入りません。

迎光祭のお知らせ

高尾山頂の大見晴らし台より、赤々と燃える初日の出を拝する、高尾山ならではの年中行事です。山頂に設けられた祈願所にて、山内の僧侶・山伏出仕のもとに一年の安全を祈願して迎光祭が行われ、参加者全員で新年を祝います。晴れた日には霊峰富士を眺める事もでき、多くの参詣者・登山者で賑わいます。





祈大願成就 身体健全

高尾 登



高尾山火渡り祭

（三月八日 日曜日）

当山では毎年三月第二日曜日に高尾山祈禱殿大広場にて、高尾山に春を招く恒例行事として、高尾山修験道による火渡り祭が、高尾山麓火渡り本尊ご寶前において盛大に執り行われます。

火渡り祭とは、高尾山主大導師のもと、全国各地の霊山で修行を重ねた山伏が、一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈禱法要であります。

この勝行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて使用される、御本尊・飯繩大権現様の功德を顕す御壇木のご志納を一本二万円にて募っております。

ご信徒の皆様、並びにご講中の議員様方におかれましては、高尾山の浄行に大いなるご信授を賜りますよう、謹んで御壇木のご志納をお願いを申し上げます。

尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院境内に一年間掲示させていただきます。御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒課までお問い合わせ下さい。

電話 ○四二六六一二二五
 大本山 高尾山 薬王院 信徒課



令和三年 庚子(かのえね)
 高尾山節分会追儺式参加申込の御案内



二月三日(月)

歳男・歳女 修行時間

第一回	午前五時(前日より当山で宿泊)
第二回	午前九時
第三回	午前十時半
第四回	正午
第五回	午後一時半
第六回	午後二時半

尚、各修行時間の三十分前、または、定員になり次第締め切らせて頂き、次の回の修行に入っておりますので、ご了承ください。

高尾山恒例の節分会(豆まき式)が、二月三日、身上安全、除災開運、災厄消除、福寿円満等の祈願をこめて開催されます。

御信徒の皆様には、歳男・歳女に参加されますようおすすめいたします。

冥加料(祈禱料)三万円

お問い合わせ 高尾山節分会係
 電話○四二(六六一)一一一五

初詣 心のふるさと
祈りのお山 **高尾山**

一月行事日程

一日 迎光祭
元旦特別開帳大護摩供
一日～七日 聖天秘供(聖天堂)
三日、十五日、二十七日 弁天様御縁日
八日 仏舍利詣り(仏舍利塔)
十七日 蛇滝清龍様御縁日
二十八日 琵琶滝不動尊御縁日
奥の院開扉供養
(十時奥之院)

◆お知らせ

初日の出登山の際に、高尾山頂が著しく混雑した場合は事故防止のため、入山規制が実施されますので、あらかじめご了承ください。
※本年も昨年に続き、初日の出の時間の前後に規制が行われました。

【お願い】

お正月三ヶ日は、高尾山麓をはしる国道二十号線は大混雑が予想されます。マイカーでの御参拝はご遠慮ください。
大晦日は、JR線、京王線、ケーブルカー等は終夜運転します。



二十一日 飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)
二十六日 高尾山とんとんむかし「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)
★お知らせ
一月中の月例写経会は行われません。

—新春大護摩奉修特別時間—

	元旦 (水)	2・3日 (木)・(金)	4・5日 (土)・(日)	6・7日 (月)・(火)	8日以降 (土曜・平日)	12・13・19日 (日・祝)	26日 (日)
午	0:00						
	1:30						
	3:00						
	4:30						
	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00
前	7:30	7:00					
		8:00	8:00			8:00	
	9:00	9:00	9:00	9:00	9:30	9:00	9:00
	10:00	10:00	10:00	10:00		10:00	10:00
	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00
午	0:00	0:00	0:00	0:30	0:30	0:00	0:30
	1:30	1:00	1:00			1:00	
		2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00
	3:00	3:00	3:30	3:30	3:30	3:30	3:30
	4:30	4:00					
後							

★例年、正月期間中は御護摩受付所において、御護摩の申し込みが集中するので、大変混雑致します。御護摩修行開始時間直前での申し込みの際には、お札の作成が間に合わない場合、次回の修行に入ってください。
あらかじめ御了承の上、御来山下さいますようお願い申し上げます。

…人車一体交通安全祈禱…

於 高尾山麓 交通安全祈禱殿

元旦は午前0時より、2日から3日までは午前8時より、4日から7日までは午前8時30分より、8日以降は午前9時より午後4時まで。(車の状況により多少時間が前後します。)

5台以上の車両でお越しの場合は、来山予定日・時間・車のナンバーの一覧表をFAXにてご連絡ください。

FAX 042-662-2135 電話 042-661-1118

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷秀文
編集人 渋谷秀芳
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
<http://www.takaosan.or.jp>